長谷のために……子どもたちにとっての故郷とは

「縁側」で開いた駄菓子屋さんは地域の方と一緒に販売できて、とても新鮮で楽しかったです。

学校の中に地域の方が集まれる場所があると、みんなで集まって話ができるのでいいですね。地域のことを詳しく教えてもらえるので勉強にもなります。

長谷は、自然が多くて空気がきれいだし、地域の方との距離が近いのもいいなと思います。将来はできれば長谷に住みたいかな。出て行っても戻って来たいと思っています。

昔懐かしい駄菓子屋さんを「縁側」で。

野口秀太くん
長谷中学校生徒会長

「縁側」ができて学校も地域も雰囲気が明るくなったと感じます。地域は元気なほうがいい。それに中学生の力が大きく関わっていると思います。

長谷には住み続けたい。自分のやりたいことは自転車のメカニック。長谷も自転車の需要は高いので、県外で知識をつけてから戻って来たい。地域の活性化に貢献できればいいですね。

羽場圭汰くん
生徒会副会長

地域に笑顔を届けることが中学生にできる地域おこし

地域の方と「縁側」で関わることで、心の底から地域を元気にしたいという気持ちが子どもたちに育ってきています。地域の方の姿を実際に見て、声を聞くことで、地域のためにできることを自ら考えます。自分たちが元気な姿を見せることが地域を元気にすると気付いてきた。地域と地域をつなぐパイプ役を中学生が担い、子どもを中心に地域がまとまっていきます。

将来の自分たちの居場所づくりのために

「長谷は好きだけど、将来は長谷から出たい」という子が多い。いいところだとわかっているが、お店がほとんどなく、この地に住むのは不便というイメージがついてしまっている。車を運転できない子どもは、高齢者の立場にも近い生活弱者といえます。

けれども、いつかはこの地に戻ってきたいと思えるようにしたい。そのためには高齢者の元気な姿や生きがいを持って輝いている姿を見て、故郷意識を育てていかないといけない。中学生にとっても縁側のような活動が将来の自分たちの居場所をつくることにつながると思っています。

長谷中学校 教頭
小林和子先生

0学年三葉組（ぜろがくねんみつば） 学校支援ボランティア　長野市立 東北中学校

先生や親とは違う良き相談相手 第三者だからこそ話せることがある

長野市郊外にある東北中学校には、「0学年三葉組」という変わった名前のクラスがあります。生徒は地域の方をはじめ、卒業生、PTA、職場体験受入企業……など、所属も年代も様々な大人たち。「子どもたちのために何かできないか」という想いで集まった「学校支援ボランティア」の皆さんです。活動内容は授業のお手伝いや、給食を一緒に食べる会、進路相談など多岐にわたります。

この日は定期的に行っている「給食を一緒に食べる会」の日。学校支援ボランティアの西澤和雄さんは1年4組の教室で一緒に給食を食べました。

「地域の方と一緒に給食を食べるのは、子どもたちにとってとても新鮮だと思います。はじめは“三葉組って何？”という子どもたちでしたが、最近では“学校のことをいろいろ助けてくれる人たち”と認識されてきています」と担任の勝山厚志先生は話します。

生徒たちと給食を共にする西澤さん（右）

「先生や親とは違う、第三者だからこそ話せることもあると思いますよ」と西澤さん。生徒たちからは進学の相談を受けることもあり、人生の先輩として中学生の良き相談相手となっています。

三葉組には、想いに賛同した地域の大人たちが続々と集まってきています。1月にはボランティアの皆さんが集える「コミュニティルーム」もできました。

「子どもたちが地域に関心を持つきっかけを与えられれば嬉しいですね。地域を知れば愛着も生まれる。そうして“地域愛”を持つ子どもが増えれば地域も元気になっていくと思います」。

東北中学校では来年度以降、子どもたちが地域に出向き様々な活動を行う計画があります。三葉組の取り組みは、子どもたちの「地域愛」をじっくりと深めています。

協力：伊那市立長谷中学校、伊那市社会福祉協議会、長野市立東北中学校

発行日：平成29年1月20日　発行：社会福祉法人 長野県社会福祉協議会　地域福祉部 ボランティア振興グループ
〒380-0928 長野市若里7-1-7　TEL.026-226-1882　FAX.026-228-0130
E-mail vcenter@nsyakyo.or.jp　URL http://www.nsyakyo.or.jp/

中学生ボランティア新聞 ふろく

私たちの学校は“まちの縁側”

＊本紙の特集事例をよりくわしく解説！ あわせてご活用ください。

先生方へ
やまびこだより
No.143
今号の特集から

「長谷の縁側」に地域の人が集います

伊那市立長谷中学校

長谷中学校は、全校生徒35名の小規模校です。
学校のある長谷地域では、少子化と過疎化が進んでいます。
高齢者世帯は増え、地域のつながりが薄れつつある中で、
みんなが元気になれる「まちの縁側」ができました。

事例の概要

学校・社協・地域で地域おこしを

伊那市の長谷中学校には地域の方が誰でも集える「まちの縁側」があります。子どもたちと地域の方が一緒にお茶のみや畑作業をしたり、時には駄菓子屋さんを開いたりと、世代間交流を楽しんでいます。

きっかけは2015年の4月。長谷地区では、保育園、小学校、中学校と地域が一体化したコミュニティスクールの立ち上げを模索していました。「地域の方との連携を強め、学校から地域を元気にしたい」という長谷中学校の想いと、「高齢者が生きがいを持って元気に暮らしていける地域をつくっていきたい」という伊那市社会福祉協議会（以下社協）の想いが合致し、「学校・社協・地域で地域おこしをしていこう」と取り組みが始まりました。

当時、社協では伊那市に「まちの縁側」を増やしていこうと進めていました。「まちの縁側」とは、地域での人間関係が希薄化している中、誰もがゆるやかに繋がれる昔ながらの「縁側」のような場所を市内に発見したり作ったりして、人間関係の再構築をしていこうという取り組みです。

その年の12月、長谷中学校のランチルームを会場に、「縁側」に興味のある方、「縁側」を実際に行っている方が情報交換をする「縁側サミット」を開催しました。当日部活動で学校に来ていた生徒も飛び入り参加し、自然な世代間交流が生まれました。「お年寄りだけでなく、子どもが入ったことで盛り上がりました」と髙木幸伸校長は話します。これをきっかけに長谷中学校の空き部屋を縁側にしようと進み始めました。

将来の自分たちの居場所として

「縁側サミット」開催後、「地域の子どもは地域で育てる」を合言葉に「長谷学区地域支え合いの会」が発足しました。

「社協の方には地域の方と学校を繋ぐパイプ役をお願いしています」と髙木校長。「社協が間に入ってくれたことで、地域の方と交流する機会が生まれました。これからも学校では困難な部分を社協がパイプ役になって、突破口を開いてくれるととてもありがたいです」

「縁側」ができたおかげで、地域の方は学校に入りやすくなったといいます。また、学校ができないことを地域でやってもらい、地域だけではできないことを学校が一緒にやるという繋がりもできました。お年寄りというと体が衰え健康に不安をもった方というイメージで、地域にいるお年寄りには視点がいかなかった子どもたちも、自分たちの元気な姿を見せることで、地域の方へ元気をあげたいという気持ちが育っています。

「高齢者の元気な姿や生きがいを持って輝いている姿を見て、子どもたちがこの地を誇りに感じてもらえるようにしたい」と願う髙木校長。「縁側」を拠点としたコミュニティスクールの成否に長谷地区の将来を見据えています。

143ふろくやまびこ0125.indd 2-3　2017/02/06 15:11

地域をつなぐ憩いの場 学校を「まちの縁側」に

伊那市立 長谷中学校

生徒数35人の小規模校の課題

かつては生徒数360人。50年間で地区の人口は3分の1、子どもの数は10分の1に……

生徒数が少ないと毎日大変……
生徒会や部活動、当番活動など
日常の教育活動だけでも
個人の役割分担は加重

生徒や職員の多忙感

保護者の負担増

長谷中学校

地域との連携が必要

学校と社協の想いが合致

学校の課題は、長谷地域の課題

急激な少子高齢化社会による
若年人口の減少、働き手の不足、
医療福祉の後退、
公共交通機関の切り捨て、
学校存続の危機

人と人とのつながりの希薄化

伊那市社会福祉協議会

地域活性化と住みよい環境づくりを

学校を開放して、地域の憩いの場をつくり，
そこに集う皆さんに学校のお手伝いをしていただければ、
協働の地域、地域の活性化が実現できるのでは……

高齢者が元気に生きがいを持って
暮らしていける地域に（介護予防）

●花壇作業
●農作業
●学習支援
●環境整備活動
など

地域の人たちにも
喜ばれています。

地域ぐるみで長谷を愛する 子どもたちを育てていこう！

学校がエンジンとなって地域を活性化させる

「長谷中学校校区地域支え合い計画」の推進

花壇の長谷

花壇づくりは、FBC（フラワー・ブラボー・コンクール）37年連続中央入選（2年連続大賞 最優秀賞）

農業体験実践活動

学校畑、耕作放棄地で野菜や稲を栽培し、給食に提供しています。

長谷の縁側

客室を改装し月１回開催しています。

多世代交流

地域の高齢者

学校に来て、
子どもたちの
笑顔を見ると
うれしいよ。

学校の
役に立つことなら
なんでもやるよ。

伊那市社協
「まちの縁側」の
登録プレート

「まちの縁側」とは？

伊那市社協では、「まちの縁側」づくり事業に取り組んでいます。
いま、地域でのつながりが薄れてきています。一人暮らしのお年寄りやひきこもりの方などがゆるやかにつながれる昔ながらの縁側のような場所を市内に発見したりつくったりして、人間関係の再構築をしていこうとはじまった取り組みです。

公民館、学校、自宅、神社の森、お店の中など、あらゆる場所が縁側になります。

長谷中のランチルームで開催されたまちの縁側サミット（H27年12月）。

伊那市社会福祉協議会
石川裕美さん

社協は、
地域の方と学校を
つなぐパイプ役を
担います。

世代間交流のキーワード「ＰＴＡ」

コミュニティースクールは、小学校と比べると、中学校では取り組みが限られます。保護者は仕事をしていて平日に学校に来てもらうのは難しく、直接的な協力が得にくい。そこで、保育園や小学校と連携することが必要です。20 代の保護者から 80 代の祖父母まで一緒に活動することで、世代間交流が深まり、地域全体で子どもたちを育てられるのではないかと考えています。

地域の大人全員がＰＴＡとして活動してくださるようなコミュニティースクールにしてみたいですね。

伊那市立長谷中学校
校長 髙木幸伸先生

学校は地域の人にとって
特別な場所。
つながりを求める方は
たくさんいます。

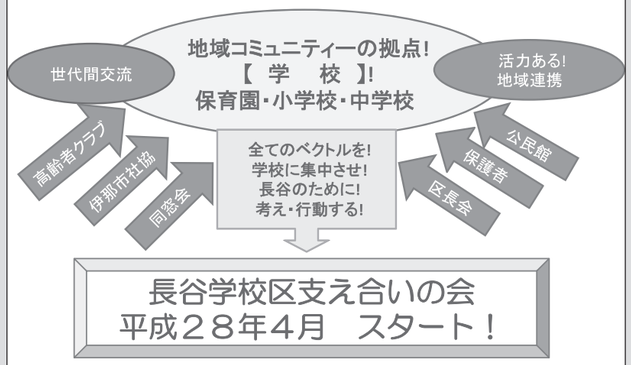
長谷中学校のコミュニティースクール構想

長谷地区らしい組織体系や運営のあり方を話し合い、地域が一体となった保育園から中学校まで、長谷学区全体を包括する信州型コミュニティースクール組織「長谷学区地域支え合いの会」が作られることとなりました。

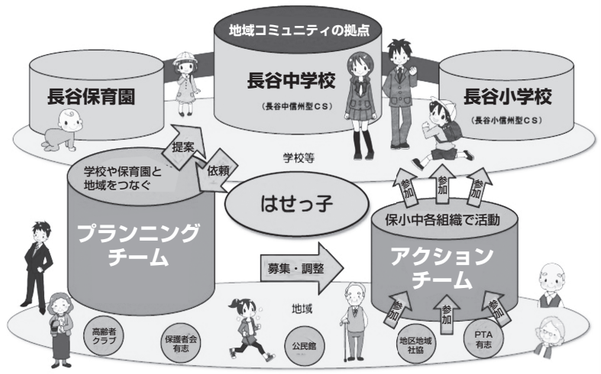
組織体制は、学校や保育園と地域をつなぐパイプ役となる「プランニングチーム」、各小中学校や保育園で実際に活動を行う「アクションチーム」の2チームで構成されます。

長谷学区支え合い組織（長谷地区コミュニティースクール構想）

長谷の宝、子どもたちを大人みんなで見守りたい。



長谷学区地域支えあい組織
【長谷学区信州型コミュニティスクール運営組織】



143ふろくやまびこ0125.indd 4-5　2017/02/06 15:11